

PC-4 屈折と派生の間にある韓国語の副詞化接辞「-i」－分散形態論による分析－

葉晨傑（京都大学大学院・博士後期課程）

shinnketu845@gmail.com

[要旨] 韓国語には形容詞語幹に接続し副詞的な構造を形成する接尾辞*-i*がある。*-i*は生産性が低いため派生に近い性質がある一方、形容詞の項構造を維持できるなど屈折のような性質もある。従来の研究では*-i*を派生接辞あるいは屈折接辞のいずれかであると排反的に説明しているが、結局それは接辞*-i*の一面を捉えたに過ぎない。本稿では分散形態論（Distributed Morphology）の理論を用いて*-i*の性質を説明しようとする。分散形態論によると、語形成の過程に統語操作が適用できるため、接尾辞*-i*による形容詞の副詞形が形容詞の項構造を保つのは自然であり、屈折に近い性質を示す。一方、挿入される前の*-i*は抽象的な形態素（副詞化素性）であり、分散形態論が提案した語彙挿入という段階で結合できる形容詞語幹が限定されるため、*-i*の生産性の低さについても説明が付く。また、*-i*による形容詞の副詞形が小節（small clause）であり、*-i*がその主要部であることを主張し、一部形容詞の*-i*副詞形が項構造を保てないことに対する説明を試みる。

1. はじめに

韓国語において、形容詞が副詞的な振る舞いをしなければならない場合、形態的操作を通して形容詞の副詞形が作られる。この形容詞の副詞形には2種類が存在し、その一つは形容詞語幹に接辞*-i*が付く*-i*副詞形で、もう一つは形容詞語幹に接辞*-key*が付く*-key*副詞形である。(1)は形容詞副詞化接辞の性質について先行研究をまとめたものであるが、(1)で分かるように、*-key*を屈折接辞として捉える研究がほとんどである一方、*-i*に関しては意見が分かれる。

- (1) a. *-i*は副詞派生接辞であり、*-key*は屈折接辞である¹。
- b. *-i*と*-key*のどちらも屈折接辞である。
- c. *-i*と*-key*のどちらも統語的接辞である。
- d. *-i*が副詞派生接辞にもなり、*-key*のような屈折接辞にもなる。

（キム＝ゴンヒ 2016: 6; 拙訳）

*-i*が派生接辞であると主張する研究は主に、*-i*に結合できる形容詞の数が限られており、生産性が低いことや、形容詞と*-i*の結合でできた一部の副詞的な成分に意味変化が生じ、意味が不透明になることなどを理由として挙げている（cf. パク＝ドンゴン 1998; ナム＝ギシム 2001; ファン＝ファサン 2006）。さらに、葉（2021: 20–21）では*-i*の適用範囲に恣意的な限界があると指摘されている。(2a)と(2b)のように、同義語をなす二つの形容詞は片方しか*-i*と結合できない。また、(2a)と(2c)のように似たような音韻環境でも、片方の形容詞しか*-i*と結合できない。つまり、*-i*の接続は意味的にも音韻的にも恣意的な制限がある。このような例から*-i*は派生に近い性質を示すことがわかる。

¹ キム＝ゴンヒ（2016）は「副詞形語尾」という韓国語に関する論文でよく使われる用語で述べているが、本稿では統一性を考慮し「屈折接辞」という名称で訳している。

- (2) a. *twukkep-* ; **twukke-i* b. *tothomha-* ; *tothomh-i* c. *kakkap-* ; *kakka-i*
 thick- ; thick-ADVR thick- ; thick-ADVR close- ; close-ADVR
 「厚い」 ; 「厚く」 「厚い」 ; 「厚く」 「近い」 ; 「近く」

-i を屈折接辞や統語的接辞（語幹ではなく句レベルに接続する接辞）として捉える研究は、*-i* 副詞形が叙述性を保ち、元の形容詞の項構造を維持する場合が存在することに重点を置いている（cf. シ＝ジョンゴン 1993; ウ＝スンジョ 2001; チェ＝ウンファン 2003）。(3a) は形容詞が使用される文であるが、それが (3b) のように *-i* 副詞形になっても元の項構造を維持している。(3) からは *-i* が屈折に近いように見える。

- (3) a. *chayk-i eps-ta.* b. *na-nun chayk-i eps-i* *halwu-lul ponay-ss-ta.*
 book-NOM not.exist-PRES.DECL I-TOP book-NOM not.exist-ADVR day-ACC spend-PST-DECL
 「本がない。」 「私は本なしで一日を過ごした。」

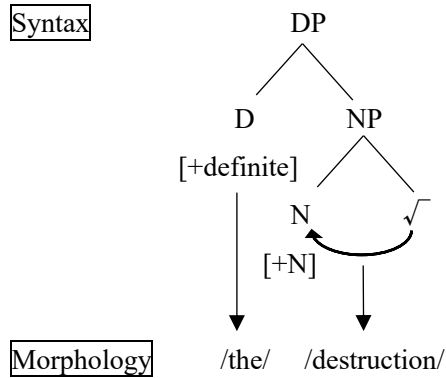
ただし、どちらの観点も *-i* の性質の一面しか解釈できないため、(1d) のような、2 種類の *-i* が存在すると主張する研究も現れた（cf. イ＝イクソプ 2003）。しかし、類似した機能を持つ同一音形を 2 つの異なる形態素として分析するのは経済的ではないと批判される。このような問題点を踏まえ、葉（2021）では派生と屈折の境界線がはっきりした二分法アプローチではなく、連続体アプローチで接辞 *-i* を捉えるべきだと指摘されている。葉（2021）は派生と屈折を区別する 11 の基準を *-i* に適用し、*-i* が派生と屈折両方の性質を持ち、派生と屈折の連続体上においてやや屈折寄りであると述べたが、このような性質を形態統語的にどう解釈すべきかに関する言及はなかった。したがって、本稿では葉（2021）の観点を受け入れつつ、分散形態論（Distributed Morphology）を用いて *-i* のこのような連続的な性質を説明する。

2. 分散形態論の枠組み

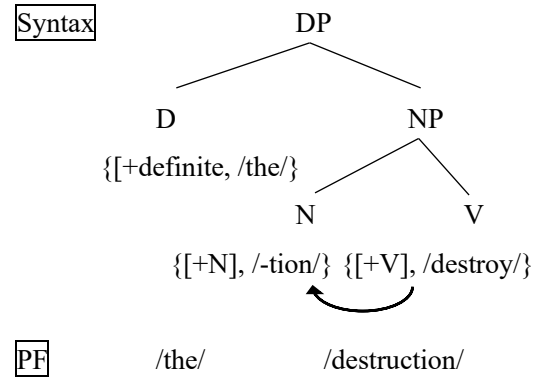
分散形態論は Halle & Marantz（1993）が初めて提案した理論で、統語部門に生成されたものがどのように PF（phonetic form; 音声形式）に実現されるかを考察するものである。分散形態論では、語以上のレベルでも語以下のレベルでも統語論によって構成され、語形成も統語的であるという Syntax-all-the-way-down の考え方があり（Bobaljik 2017）。また、統語操作や原理が適用される節点（terminal nodes）にあるものは統語的・意味的な素性しか持たず、統語部門が終わり書き出し（Spell-out）の後に語彙挿入（Vocabulary Insertion）が行われて初めて、対応する音韻的な素性が付与される（Halle & Marantz 1994）。これは遅い挿入（Late Insertion）と言い、分散形態論のもう一つの中心的な考え方である。

分散形態論と語彙主義（Lexicalism）の枠組みがどう異なるかに関して、(4) を例として挙げる。(4b) のように、語彙主義では統語的・意味的な素性と音韻的内容がともに語彙部からひとまとまりとして統語部門に導入される。それに対し、分散形態論では (4a) のように、統語部門で扱われるのは抽象的な素性のみで、音韻的内容が決定されるのは統語操作が終わった後である。

(4) a. 分散形態論



b. 語彙主義

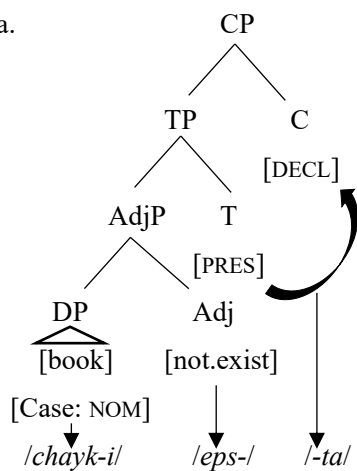


(田川 2008: 15)

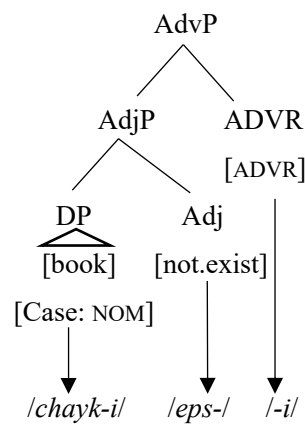
3. 分散形態論による*-i*の挿入

分散形態論に従い、統語操作されるものは抽象的な素性に過ぎないため、*-i*という形態素も例外ではなく統語的な素性として併合される。*-i*の機能が形容詞を副詞的な成分に変換することから、*-i*の素性を[ADVR]と仮定することができる。元の形容詞文(3a)と*-i*副詞形が使用される(3b)の例を樹形図に反映すると、(5a)と(5b)のようになる。(5a)を見ると、形容詞 *eps*が必須とする項は一つで、この場合では主格助詞を取る *chayk-i*という名詞句が項を担うことがわかる。一方、形容詞が(5b)のように副詞形になっても、副詞化素性は形容詞句全体に併合するため、形容詞句の構造をそのまま保つことができる。

(5) a.



b.

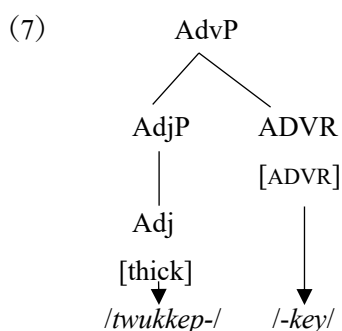


一方、素性[ADVR]に対応する音韻的素性は常に*-i*である必要はなく、前の形容詞、つまり接続環境によって変わるとすれば、*-i*の接続制限についても解釈できる。(6)のような語彙挿入のルールを想定できる。2つのルールの中で(6a)が先に適用され、*-i*と結合できない形容詞が*-key*に接続される。そして残った形容詞は*-i*とも結合できるため、*-i*や*-key*のどちらかの音形で現れる。このような形容詞の数は少なくない。そして多くの場合で*-i*と*-key*の置き換えが可能である。このように同じ機能を果たす二つ以上の形式が同時に使われる現象は他の言語でも見られる。英語の一部動詞が過去分詞になるとき、接尾辞 *-n* が付く場合もあれば、デフォルトの過去分詞接尾辞 *-d* が付く場合もあり、このような交替は

違う話者の間でも、同じ話者の違う発話でも観察される (*prove, proved, proved/proven; swell, swelled, swelled/swollen*; Halle & Marantz 1993: 125–126)。もし *-i* と *-key* の置き換えが意味変化をもたらさないなら、これは自由変異として扱うべきであるが、自由変異に関して分散形態論でどう処理すべきかはまだ明らかになっていない。自由変異に関しては更なる考察が必要であるが、現段階では、(6b) のようなルールを想定することが一つの考え方として挙げられる。

- (6) a. [ADVR] \Leftrightarrow *-key* /]_{ADJ} ___ ; where ADJ \in { *twukkep*-(thick), *ccalp*-(short), etc. }
 b. [ADVR] \Leftrightarrow *-i/-key* /]_{ADJ} ___ ; where ADJ \in { *eps*-(not.exist), *ppalu*-(quick), etc. }

(2a) のような *-i* と結合できない形容詞には、(6a) のルールが適用され、(7) の樹形図で示すように音韻的な素性が付与される。



4. 項構造を維持できない *-i* 副詞形

多くの形容詞 *-i* 副詞形が形容詞の項構造を保っているが、葉 (2021) の調査によると、一部の形容詞 *-i* 副詞形は項を取ることが難しい。例えば、(8a) の形容詞文を項構造の維持されたまま (8b) のように *-i* 副詞形にすると、かなり不自然な文と判断されるが、(8c) のような *-key* 副詞形の文は適格である。このように *-i* 副詞形が項構造を維持することが難しい形容詞は存在するが、維持できない項は主に主格助詞が付く名詞句、つまり元の形容詞の主語となっている²。

- (8) a. *kacikaci pulkkoch-tul-i saykchay-ka hwalyeha-yss-ta.*
 various firework-PL-NOM colour-NOM splendid-PST-DECL
 「色々な花火が色が華やかだった。」
- b. [?]*kacikaci pulkkoch-tul-i saykchay-ka hwalyeh-i pamhanul-ul swunoh-ass-ta.*
 various firework-PL-NOM colour-NOM splendid-ADVR night.sky-ACC embroider-PST-DECL
- c. *kacikaci pulkkoch-tul-i saykchay-ka hwalyeh-key pamhanul-ul swunoh-ass-ta.*
 various firework-PL-NOM colour-NOM splendid-ADVR night.sky-ACC embroider-PST-DECL
 「色々な花火が色が華やかに夜空を飾った。」

² 葉 (2021) では他の助詞の付く名詞句についても考察されたが、主格助詞の付く名詞句ほど *-i* 副詞形と共起しにくくはない。したがって、本稿では最も問題となる主格助詞の付く名詞句を考察する。他の格助詞については今後の課題にする。

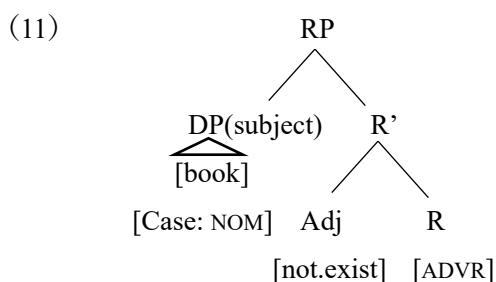
項構造を維持できるかどうかは形容詞語幹によって変わるだけでなく、話者の個人差にも影響される。(9a)の形容詞文を(9b)のような*-i*副詞形に変えることはできるが、2人の母語話者がやや不自然な文として捉えている一方、もう1人の母語話者は文法的な文として認めている。一方、*-key*副詞形が使用される(9c)のほうが自然な文であると判断される。この場合でもやはり主格助詞の付く名詞句が問題になる。

- (9) a. *ce pihayngki-ka koto-ka noph-ta.*
 that aeroplane-NOM height-NOM high-PRES.DECL
 「あの飛行機は高度が高い。」
- b. [?]*ce pihayngki-ka koto-ka noph-i tte-ss-ta.*
 that aeroplane-NOM height-NOM high-ADVR float-PRES.DECL
 「あの飛行機は高度が高く飛んだ。」
- c. *ce pihayngki-ka koto-ka noph-key tte-ss-ta.*
 that aeroplane-NOM height-NOM high-ADVR float-PRES.DECL
 「あの飛行機は高度が高く飛んだ。」

主格を取る項と*-i*副詞形の項構造の維持との間にある関連性を説明することが必要である。ここではKo (2015)の主張を取り入れる。Ko (2015)は韓国語における4種類の結果構文(resultative construction)を考察し、これらの結果構文が統語上小節(small clause)であることを主張する。この4種類の中には、(10)のような副詞形接辞*-key*を使い、主格助詞の付く名詞句が形容詞の項として残るものがある。

- (10) *John-un patak-i hayah-key chilha-yess-ta.*
 John-TOP floor-NOM white-ADVR paint-PST-DECL
 「ジョンは床を白く塗った。」 (Ko 2015: 349)

Ko (2015)では、このような構造がRelator Phrase (RP)とされており、*-key*がこのRPの主要部であり、元の形容詞の主語がRPの指定部にあると述べられている。本稿では、このRP構造が結果構文だけでなく、他の副詞形構造にも適用できると主張し、*-i*副詞形の項構造を説明する。つまり、副詞化素性である[ADVR]がRPの主要部として併合され、(3a)にある*chayk-i*や(8a)にある*saykchay-ka*、(9a)にある*koto-ka*など元の形容詞の主語がRPの指定部にある。(3b)のRP構造を(11)の樹形図で示す。



(11)からわかるように、形容詞の主語にあたる名詞句が構造上 RP の主要部である副詞化素性[ADVR]をC統御(c-command)する。これを踏まえ、(6)のルールをさらに精密化させ、(12)のような語彙挿入のルールを設定することができる。まずは、(12a)のルールが機能し、恣意的な接続制限で*-i*副詞形を作れない形容詞の場合では副詞化素性[ADVR]が*-key*と発音される。次に(12b)が適用され、*-i*副詞形が主格助詞の付く名詞句とともに現れない形容詞の場合でも[ADVR]に*-key*という音韻的素性が与えられる³。ただし、このルールは個人差に関わるため、ルールの適用環境となる形容詞の種類は話者によって異なる。最後に(12c)が適用され、*eps-*や*ppalu-*のような主格助詞の付く名詞句と共起できる形容詞や、*hwalyeha-*のような主格助詞と共起しがたいが(12b)ですでにその可能性が排除された形容詞などが、*-i*または*-key*のどちらかの音形で実現される。*noph-*のような形容詞は話者によって異なるが、主格助詞の付く名詞句と共起できない話者にとっては*hwalyeha-*と同じように、(12b)の環境となる形容詞にも含まれる一方、主格助詞の付く名詞句との共起が許される話者にとっては(12c)の環境だけに含まれる。

- (12) a. [ADVR] ⇔ *-key* /]_{ADJ} ___ ; where ADJ ∈ { *twukkep-*(thick), *ccalp-*(short), etc. }
 b. [ADVR] ⇔ *-key* /]_{ADJ} ___ ; when c-commanded by [Case: NOM]
 and where ADJ ∈ { *hwalyeha-*(splendid), *kil-*(long), etc. }
 c. [ADVR] ⇔ *-i/-key* /]_{ADJ} ___ ; where ADJ ∈ { *noph-*(high), *eps-*(not.exist), *ppalu-*(quick),
hwalyeha-(short), etc. }

5. おわりに

本稿では韓国語における派生と屈折両方の特徴を示す接尾辞*-i*の形態統語的な説明を試みた。分散形態論の理論をもとに、接尾辞*-i*が統語操作される前には副詞化素性に過ぎず、書き出しの後に音韻的な素性が付与されると主張し、(6)のような語彙挿入のルールを提示した。これによって*-i*により作られた副詞形が元の形容詞の項構造を保つことも、*-i*が恣意的な接続制限を呈することも解釈できる。また、主格助詞が付く名詞句と共起できない場合もあることを考慮し、(12)のようなより精緻なルールを提示した。ただし、*-i*と*-key*の自由変異についてはさらに分析しなければならないため、*-key*副詞形の特徴や、*-i*副詞形と*-key*副詞形の対照について考察を進める必要がある。

謝辞

本稿の作成にあたって、定延利之先生、千田俊太郎先生、Adam Catt 先生、大竹昌巳先生、そして徐敏徹氏、川畑祐貴氏、韓旼池氏、王丹氏から有益なコメントをいただいた。先生方と各氏に深く感謝を述べたい。そして、容認性判断をしてくださった韓国語母語話者の方々にも感謝を申し上げたい。ただし、

³ Ko (2015)によると、小節にはTやCなどの機能範疇が存在しない。また、実際の*-i*副詞形や*-key*副詞形の例文を見るとわかるように、時制を表す形態素が副詞形に現れない。主格付与がTに許可されるというのは生成文法の一般的な考え方であるが、(9b)や(10)のように韓国語の副詞形とともに現れる名詞句が何から主格を付与されるかが問題となる。Ko (2015)はこれについて詳しく分析していないが、いくつかの可能性を提示した。その中の一つは、韓国語では主格がデフォルト格(default Case)で、ある名詞句に格付与ができない場合にその名詞句に主格が与えられるという仮説である。他にも、副詞形には実際発音しないTが存在するなどの可能性が挙げられる。主格に関する問題は今後の課題にする。

本発表に誤りがあった場合、その誤りは全て筆者に帰するものである。なお、本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。

略語

ACC: accusative; Adj(P): Adjective (Phrase); AdvP: Adverbial Phrase; ADVR: adverbialiser; C(P): Complimentiser (Phrase); DECL: declarative; D(P): Determiner (Phrase); N(P): Noun (Phrase); NOM: nominative; PL: plural; PRES: present; PST: past; TOP: topic; T(P): Tense (Phrase); V: Verb.

参考文献

- Bobaljik, Jonathan David (2017) Distributed Morphology. In Mark Aronoff (Ed.) *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*. DOI: <https://doi.org/10.1093/acrefore/9780199384655.013.131>.
- ファン=ファサン 황화상 (2006) 「-i」形副詞語の文法範疇 『한국어학』 32: 265–287, (‘-이’형 부사어의 문법 범주).
- Halle, Morris & Alec Marantz (1993) Distributed Morphology and the pieces of inflection. In Kenneth Hale & Samuel Jay Keyser (Eds.) *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, 111–176. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Halle, Morris & Alec Marantz (1994) Some key features of Distributed Morphology. In Andrew Carnie, Heidi Harley & Tony Bures (Eds.) *Papers on phonology and morphology, MIT Working Papers in Linguistics 21*, 275–288. Cambridge, MA: The MIT Press.
- イ=イクソプ 이익섭 (2003) 『国語副詞節の成立』 서울: 태학사, (국어 부사절의 성립).
- キム=ゴンヒ 김건희 (2016) 「「形容詞+key」の副詞化—標準国語大辞典の「「形容詞+key」の形で使われ」分析を中心に」 『한말연구』 41: 5–36, (‘형용사+게’의 부사 되기—표준국어대사전의 “형용사+게” 꼴로 쓰여’ 분석을 중심으로—).
- Ko, Heejeong (2015) On the typology of small clauses: Null subject and mode of Merge in resultatives. *Studies in Generative Grammar* 25(2): 347–375.
- ナム=ギシム 남기심 (2001) 『現代国語統語論』 서울: 태학사, (현대국어통사론).
- バク=ドンゴン 박동근 (1998) 「副詞語派生の接尾辞「-i」に対する研究」 『한말연구』 4: 127–146, (어찌 씨 파생의 뒷가지 ‘-이’ 연구).
- シ=ジョンゴン 시정곤 (1993) 「副詞化接辞「-i」の統語的解釈」 『어문논집』 32: 473–494, (부사화접사 ‘-이’ 의 통사적 해석).
- 田川拓海 (2008) 「分散形態論による動詞の活用と語形成の研究」 博士論文, 筑波大学.
- チェ=ウンファン 최응환 (2003) 「現代国語「-i」形副詞化の文法的特性—形容詞語幹/(状態性)語根を語基とする副詞化を中心に」 『언어과학연구』 27: 365–384, (현대국어 ‘-이’형 부사화의 문법적 특성—형용사 어간/(상태성) 어근을 어기로 하는 부사화를 중심으로—).
- ウ=スンジョ 우순조 (2001) 「構文分析器開発の観点から見た「i」派生接辞の問題と代案的分析—内部の項を中心に—」 『언어학』 28: 129–154, (구문분석기 개발의 관점에서 본 ‘이’ 파생접사의 문제와 대안적 분석—내부 논항을 중심으로—).
- 葉晨傑 (2021) 「韓國語における派生と屈折について—形容詞副詞化接辞「-i」を中心に—」 修士論文, 京都大学.